

クは、そんな難しさを感じた2ヵ月半であった。駐在員とナショナルスタッフのあいだに入る、自律した「第三の存在」としての位置づけを確立し、少しずつ見えない壁を取り払うことが次のフィールドワークで自身に課す課題である。もしかすると、この課題を克服するプロセスは、ガーナにおいて他者から受ける「大学院生」と「日本人」という2つのラベリングを戦略的に利用し、「第三の自分」を創造するという私なりの「ソフトレ

ジスタンス」なのかもしれない。

引用文献

- 外務省. 2023. 〈<https://www.mofa.go.jp/mofaj/files/100436737.pdf>〉(2024年5月20日)
- Ghana Statistical Service. 2023. 〈https://statsghana.gov.gh/gssmain/fileUpload/pressrelease/AHIES%20QUARTER%203%202022%20LABOUR_STATISTICS_REPORT.pdf〉(2024年5月20日)
- 松田素二. 1999. 『抵抗する都市—ナイロビ 移民の世界から』岩波書店.

ファインダー越しに繋がる世界

——カメラによる出会いの記録からみえるラオス——

好 光 百 合 *

「Sabaidii, thaihub dai bo? (こんにちは、撮影してもいいですか?)」

道すがら、出会うラオスの人たちにこのように声をかけると、みんな少し照れながら「いいよ、いいよ」と応対してくれる。そして、この言葉をきっかけに会話が始まる。

私にとってカメラは気分転換となる趣味のひとつであり、人との会話のきっかけを生み出すツールであり、そしてフィールドワーク中の副産物的な出会いの記録として機能している。そのような出会いの中で、たまたま調査に繋がる機会もある。間接的に研究活動の

助けにもなっていて、フィールドワークには欠かせない存在かもしれない。今回の滞在でも、5台のカメラをフィールドへ持ってきた。一眼レフ、フィルムカメラ、デジタルカメラなど気分や場面によってカメラを使い分けるこだわりがある。また、撮影した写真は街中のコピー屋さんで印刷し、被写体となった人々に渡すのも楽しみのひとつである。データとして渡すよりも、紙で渡すことで彼らの思い出となってくれたらという思いからだ。

ここでは、そんなカメラを通じた人との出

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

会いの記録の一部から垣間見えたラオスを語りたい。

ここは、ラオス最北部に位置するボンサリー県にあるムアンクア郡。調査のため北部の県を移動し、調査拠点である首都へ戻の際に経由した場所だ。ベトナムとの国境に近く、毎朝ベトナム北部のディエンビエンフー行きのバスが運行している。この地を經由したのは、県境を舟で越えるためだ。メコン川支流のナムウー川に沿った小さな集落であるムアンクアには、バスだけでなく、1日2便の舟が隣県のルアンパバーン県へ向けて出発する。ある日の午前にバスで村に到着し、舟着き場に向かい、舟乗りの男性たちに声をかけた。

「舟に乗りたんだけど、何時に出発するの？」

「おお、ちょうど15分前に舟が出て行ったよ。ちょっと待って、こっちに戻るように電話する」

こう快活に答える男性は、先ほど出た舟の運転手らしき相手に電話をかける。長時間のバス移動で疲れていたため、彼がとても頼もしくみえた。残念ながら舟が戻ってくることはなく、明日の便で移動するように勧められた。聞けば、コロナ禍によって1日1便に便数が減ったとのことだ。

翌日までやることがないので、村中を歩き回り、カメラを首から下げながら散策の時間とした。川に沿って形成された集落の村だからだろうか、川ではさまざまな人たちに出会った。下り坂を利用して、自転車で川に突っ込むという少々危なっかしい遊びを楽し



写真1 舟着き場で運転手に電話をかけてくれた男性

んでいる少年の集団、停留している舟の周りで井戸端会議をしている舟乗り、川の水でバイクを洗車する男性。

彼らにとっては何ら変わりのない日常生活風景なのだろう。しかし、なんだか彼らの姿が私の目には生き生きとして映り、思わず声をかける。

「今日も仕事なの？」

「いつもここでバイク洗ってるの？」

ぐいぐい質問する私を鬱陶しく思わずに「明日の舟を運転するんだ、明日はそのまま経由地の村に宿泊するよ」「みんなよくここで洗うよ」とそれぞれ朗らかに答えてくれ、舟の仕事内容や乗り継ぎ場所、時間など、今まで知らなかった情報を談笑を交えて提供してくれる。調べても出てこない、その土地の生の情報を確保するためにも重要な時間だ。そんな彼らとの会話の中で、思わず笑顔に

なったり、真剣な表情になったりする瞬間がある。ひとたびその瞬間を見ると、自然とシャッターを切ってしまう。撮った写真を見せると「うん、いいね!」と満足げな顔をこちらへ向けてくれ、お互いその場から離れる。

「じゃあね、また明日!」

翌日、昨日逃した便に乗り込み、約5時間の舟移動を開始した。舟からの風景はラオスの生活を少しだけうかがい知れる。水浴びをする僧侶、川沿いに佇む小さな集落で農作業をする人、その周りを走り回る子ども、そして舟の横を通り過ぎるスイギュウの群れ。ラオスならどこでも見るような光景だが、舟からだ、また新鮮に感じる。

この道中では、隣村に住んでいるというラオス人女性が横に座った。ムアンクアに用事があり、そこから帰る道中だと言う。彼女と会話が弾む。「あなた、私の娘に似ているわ」と笑顔でスマートフォンから写真を見せてくれる。カメラのフラッシュが光り、液晶モニターに彼女の顔が映る。「子どもは何人いるの? 家族は?」と聞き返しながら、初対面の人への質問として、家族の話題を出すようになって自分自身に対し、ラオス人になったもんだと心の中でほそっと呟いた。

舟に揺られ、少し眠たくなってきたところで中継地点の集落に止まった。集落から数人の村人が集まり、舟に積んでいた大きな段ボール荷物を引き取る。その中には小学生ぐらいの子どもの姿もある。自身の背丈とあまり変わらない荷物を一生懸命に抱えている。子どもたちは「労働」や「仕事」をしている



写真2 舟から荷物を降ろす運転手

というよりも、「家のお手伝い」をしている感覚に近いのだろうか。食堂や道端に行けば子どもが接客し、宝くじや果物を売っている様子をよく見かける。そんな彼らの仕事ぶりを目の当たりにするたびに純粋に感心し、自分自身がこの年齢の時に同じことができたのだろうか、彼らと自分を重ね合わせ、田んぼの周りで友人とともに虫を採り、遊び走り回っていた時代に想いを馳せた。

この時は、岸に舟を着け、荷物を運び、舟を支える運転手の仕事ぶりにも強く惹かれた。ラオスは2022年に中国資本によって鉄道が初めて開通したが、未だ主な交通手段はバスで、舟で移動する場面も少なくはない。大量の荷物を載せた、不安定な小舟で移動する彼らの仕事ぶりは時に荒々しいように感じ

るが、力強く、動きに無駄がない職人技だ。そんな舟乗りの後ろ姿を見て、カメラを思わず握る。撮ってもいいか身振り手振りでジェスチャーを送り、シャッター音が静かに鳴る。とうとう目的地になり、私のバックパックを親切に降ろしてくれた彼にこう伝えた。

「本当にありがとう！」

辿り着いた場所は、ルアンパバーン県ムアンゴイ郡。ここは小さな集落で、バンガローなどでゆっくり滞在できると、一部の海外旅行者たちの間では人気の穴場スポットともなっている。

しかし、完全に観光地化された場所でもなく、欧米人向けのレストランやバンガロー、地域住民の居住空間が入り混じっている。狭い空間に、観光客の外国人と、軒先で機織りをしたり漁の準備をしたりしているラオス人が混在する。ラオスの中でも珍しい光景が広がっているのが、ムアンゴイだ。

この村で、昼間にカメラを抱えて道を歩くと、背中に人の気配を感じた。外国人の存在に慣れた様子の子どもたちが、興味津々で近寄ってきたのだ。誰もがスマートフォンによって簡単に撮影ができ、写真や映像を楽しむ時代である故なのだろうか、一眼レフが彼らにとって物珍しいようだ。「今日はもう学校終わったの？」と尋ねると、「終わったよ！学校に行ってみる？」と子どもたちに言われるがまま小学校の校庭に向かう。

「中国人なの？ 韓国人なの？」「ううん、日本人だよ」

「君は今何歳なの？」「あなたは？」

そんな他愛のない会話を続けながら校庭に

到着した。そのまま私を放置して、だるまさん転んだで遊び始める。すると、子どもたちが韓国語で「だるまさんが転んだ」と言っているのが聞こえた。2021年にNetflixで配信され、大人気となった韓国ドラマ「イカゲーム」での名場面を真似しているようだ。よく見れば、ドラマキャラクターが着用している服と同じデザインのワンピースを子どもが着ている。タイやベトナムで流通したものが、ラオスのマーケットに少し遅れて流れ着いているのだろうか。ラオスでは、2023年現在でもコロナ禍中に日本や韓国で流行ったアニメ・ドラマのキャラクターを模倣した商品をナイトマーケットでよく見かける。特に、ここ近年は、韓国がラオスに対して影響を与えていることを日々感じる。韓国のポップソングを聞く人や韓国焼酎を飲む人が増え、多くの韓国人団体観光客がゴルフを楽しむためにラオスを訪問し、首都の街中でも韓国の大きな観光バスを見かけるようになった。5年前にラオスに滞在した際は、「日本人か？」と尋ねられることが多かったが、最近はおそらく「韓国人か？」と質問される。現に、子どもたちにもそのように尋ねられた。ラオスにとって、中国に次いで韓国が東アジアの中でも近い存在となっているのだろう。そんなラオスと東アジアの関係に思考を巡らせながら、子どもたちの姿をファインダー越しにおさめる。そして、遊びに飽きた大人数の子どもたちに、強めに腕を引っ張られながら小学校内を案内され、椅子に座られる。私が「このラオス語、どうやって書くの？」と聞くと、こぞって黒板に文字を書き



写真3 小学校を案内する子どもたち

出す。ひょんなことから始まった授業を形に残そうと思い、カメラを弄っていると、子どもたちが思い思いのポーズを取り始める。可愛らしい仕草をする子、真顔でレンズを見つめる子、はにかんだ笑顔で棒立ちする子。ポーズだけでもそれぞれの個性が出る。

そろそろ夕飯を食べるからと小さな先生たちに別れを告げた。彼らも夕飯の時間だ。親たちが帰りを待っているだろう。少し寂しい気もするが、最後まで笑顔で。

「バイバイ！元気だね！」

さあ、今日もカメラを相棒に、新しい出会いに期待しながら道を歩きつづけていこう。

「Sabaidii, thaihub dai bo ? (こんにちは、撮影してもいいですか?)」

ネパール「人民戦争」の終結に関する語り

—K.B. ロカヤ氏の証言より—

荒 木 彩 陽 *

2023 年夏、私はネパールの首都・カトマンズを中心に、ヒンドゥー・ナショナリストやその他宗教団体に所属している活動家たちに対するインタビュー調査を行っていた。調査を進めていく中で、クリスチャンの活動

家として紹介してもらい出会ったのが、K.B. ロカヤ氏である。

K.B. ロカヤ氏とは？

医療設備もない田舎の、ヒンドゥー教徒の

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科